

## 笑顔あふれるプレイルームを目指して

鈴木のだか

(保育士)

「今日は、こんなものを持ってきたよ」

私は、プレイルームに集まった子どもたちに、新聞紙と画用紙で作ったフリスビーを出しました。「見ていてね」と飛ばしてみると、プレイルームの端まで飛んだフリスビー。「みんなも作ってみる？」と問いかけると、「うん！」と返ってきました。



これは、製作あそびをした時のプレイルームの様子です。

私は筑波大学附属病院で保育士として働いています。その中にある小児病棟には、〇歳から十五歳までの子どもたちが入院・生活をしています。私たち保育士四人は、入院する子と家族のQOL (Quality of Life) 向上を目指して活動しています。

病棟では、保育士自身がベッドサイドに行つて子どもたちとかかわる個別保育と、プレイルームに来た子どもたちとかかわる集団保育を行っています。

個別保育では、手術後で安静が必要であったり、感染しやすかったりして、プレイルームに行くことができない子と遊びます。看護師に、かわる時に

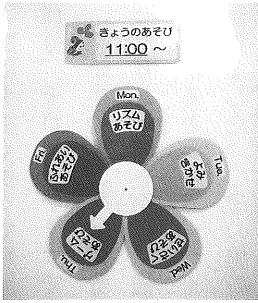
鈴木のだか (すずきのどか)

保育所保育士として三年間勤務。現在筑波大学附属病院保育士。子どもとの約束を守りいつも笑顔でいることで、子どもと家族が安心できる存在になることが目標です。

気をつけることを聞き、情報交換をしながら、ベッドサイドでも楽しめる手遊びや製作などをします。

集団保育をするプレイルームは病室とは別に設けられており、子どもたちは家族や保育士と一緒に、玩具などで遊ぶことができるようになっていきます。病院でも遊びの場を保障し、子どもらしい生活を過ごすために大切にしている場です。

プレイルームでは、子どもたちと好きな遊びをして過ごします。一対一でのかわりが多くなりがちですが、子どもたちに、集団遊びの楽しさも経験もする機会としていきます。保育士同士で協力し、子どもたちの発達やねらいに合わせた「ふれあいあそび」や「製作あそび」、「ゲームあそび」などをしてい



ます。入院生活での楽しみをつくり、気分転換を図ることも目的としています。

その中の一つ、「製作あそび」をするにあたり、単に製作をするだけではなく、作ったもので遊ぶ楽しさを味わってほしいと考えました。新聞紙と画用紙で作るフリスビーは自分自身が短大の時に授業の中で取り組んだ活動で、「これなら、子どもたちと楽しめる」と思いました。作って飛ばした時のうれしさや開放的な気持ちも思い出し、活動に取り入れることにしました。

### フリスビー作りをしよう

その日のプレイルームには、〇歳から小学校低学年までの六人と、家族四人が集まっていました。

「みんなも作ってみる？」という声掛けに、「うん！」と子どもたち。早速活動に取り組んでいきました。テーブルに座ることのできる子はテーブルで、小さな子はお母さんのひざの上で作っていきます。丸く

切っておいた画用紙に自分の好きな絵を描いたら、新聞紙を細く折って端同士を留め、丸くしたものを作り、セロハンテープで留めて仕上げていきます。

小学生の女の子は自分の好きなキャラクターをじっくりと時間をかけて描き、四歳の男の子は一つ出来上がると「もう一つ！」と二つ目の製作に取り掛かりました。○歳の男の子はお母さんの作ったフリスビーをぎゅっと手で握っていました。年齢もさまざまなので、いろいろな反応や声が返ってきました。

みんなのフリスビーができたところで、人に向かって投げないこと、感染予防のために土足では歩かないプレイルームの中で飛ばすことを伝えました。

自分の作ったフリスビーが飛ぶと、「わー！」と歓声や笑顔が出ました。何回も投げて拾ってと繰り返すうちに、だんだんと遠くまで飛ぶようになりました。自分の思った所と違う所に飛んでいくと、一緒に参加したお母さんや子どもたちが拾います。「はい」「どうぞ」「ありがとう」と、周りとのかかわりも生

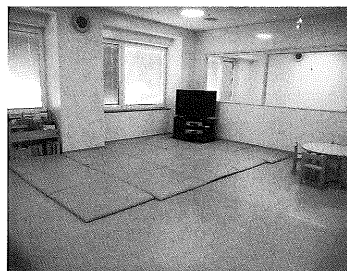
まれました。

昼食がワゴンに乗って運ばれてきたところで、一度、あそびの時間は終わり。「まだ遊びたい子は、もう少し遊んでいても大丈夫だよ」と声を掛けました。

### その後のプレイルーム

昼食に戻った子どもたち。午後になると、作ったフリスビーを手に持って遊びに来ていました。あそびの時間〴〵に来ていなかった三歳の男の子に「作ってみる？」と問いかけると、「うん」と返事がありました。そこで、午後も子どもたちとフリスビー作りをしました。お母さんからは「家でも作りたいので、画用紙の大きさを教えてください」と言われました。

小学生の女の子は、自分が投げて遊ぶだけではなく、プレイルームに来ていた同室の三歳の女の子に投げ方を教えていました。一緒にフリスビーを持つ



て「こうやるんだよ」と教える姿がありました。

四歳の男の子は次の日もプレイルームにフリスビーを持って遊びに来ていました。何度も投げて遊んでいるうちに、フリスビーは画用紙がしわくちやになっっていました。

今回の活動では、笑顔で遊ぶ子どもたちの姿や、子どもたちと家族からの反応を見ることができました。子どもたちが作ることで遊ぶことの楽しさを感じることで、それが「もっと作りたい」という発言や、「あそびの時間」が終わってもフリスビーで遊ぶことにつながったのだと思います。

この「あそびの時間」を通して、自分で気付かなかった点が見え、反省することも多くあります。今回の活動では、子どもたちの興味を引きつけることができるような声掛けや導入ができるようになりたいと感じました。保育士側が一方的に遊びを提供するのではなく、子どもと家族、保育士と一緒に遊ぶ

中で展開していけるような病棟での保育がこれからの目標です。

子どもたちからの、「面白かった」「もっとやりたい」という前向きな気持ちを聞くことができるような保育をしていきたいと思っています。

病院で働き始めて一年がたちます。保育所保育士として働いていた時とは違う、子どもたちの幅広い年齢や、置かれている環境に合わせた保育をすることの難しさを感じています。子どもの発達に加え、病気のことにも配慮が必要です。医療保育に関する知識を身につけ、今後は医療保育専門士の資格取得を目指します。そして、一人ひとりやその場に対応できる保育ができるようにします。

また、病院にはさまざまな職種が連携して働いています。保育士同士はもちろん、他職種とのコミュニケーションも密にとりながら、子どもたちのよりよい生活のために活動していきます。